

咸臨丸終焉150周年記念式典に 寄せて

咸臨丸子孫の会 会長
藤本 増夫



咸臨丸終焉150周年記念式典実行委員会の皆様「咸臨丸とサラキ岬に夢みる会」また、木古内町の皆様、咸臨丸終焉150周年記念事業式典の開催おめでとうございます。

これまでもサラキ岬に立派な史跡公園を整備したり、咸臨丸祭りを毎年開催されたりと、長年にわたり大変なご努力をされてきましたが、今回は終焉150周年記念式典を開催していただき誠にありがとうございます。咸臨丸子孫の会を代表して厚く御礼申し上げます。

咸臨丸は1860年、黒船来航の騒ぎから僅か7年後に幕府軍艦として太平洋横断したことで有名ですが、その後も小笠原開拓、江戸、大阪間の要人移送など休む間もない活動を続けました。晩年には大砲などの軍装や蒸気機関も撤去されて帆船の輸送としてなお酷使されました。

最後の航海は、戊辰戦争で敗者となり、土地を失って蝦夷地への移民を強いられた仙台藩白石の片倉小十郎家401人の家臣団でした。最後の乗船者として相応しい人々だったとも言えましょう。

1871年、函館から、小樽に向かう途中で咸臨丸はサラキ岬で座礁、沈没しましたが、地元の方々の支援によって乗客には1人の犠牲者も出なかったと伝えられています。その一方、咸臨丸自体については、度々の潜水調査によっても未だに遺産が見つかっておりません。

本年6月、公益社団法人日本船舶海洋工学会ふね遺産認定実行委員会より、咸臨丸は第5回ふね遺産に認定されました。

地元の歴史遺産である咸臨丸を引き続き見守って頂けるようお願い申し上げます。